





## 第零幕

城の裏手の広場。

ユダヤ人の少女が通りかかる。少女は広場の中央にある牢獄を見やると、辺りに落ちていた石を拾い、牢めがけて投げつける。

慌てて兵士が駆けつけるが、少女は宮殿へ一目散に走り去る。

とある本番の日。

同じ広場。ティゲリヌスとユダヤ人の夫婦が通りかかる。

ティゲリヌス

死海に現れた預言者というのは、この男ですか。

ユダヤ人1

その通りです。

ティゲリヌス

群集を惑わす男など、早く殺してしまえばいいのに。

第一の兵士

王は、民の心までも考えてらっしゃるのです。

ティゲリヌス

信望を失った後のことが怖いでしょう。この者は何故捕らえられたのです？

ユダヤ人1

王を侮辱した罪により捕らえられておるとか。

ティゲリヌス

侮辱とは？

ユダヤ人1

王とヘロデア様との婚姻は、許されがたい淫らなものであると。

ティゲリヌス

ああ。その通りだと私も思います。

ユダヤ人2

そうなんですか？

ティゲリヌス

だってそうでしょう。恋は盲目なんて年でもない。色恋に滅ぼされた男の典型ですよ。

ユダヤ人2

愛に身を捧げたのだと思うと、素晴らしいと私なんかは思いますけれど。

ティゲリヌス

情けない王ですよ。宴もそうです。退屈極まりない。辺境の王であるからしてローマ式の歓待というものを一切理解していない。

第二の兵士

娯楽の少ない土地なものですから。

ティゲリヌス

あげくには、娘までもが宴に姿を現さない始末。奥方も、心の中ではどう思っているのやら。

第二の兵士

ヘロデア様は、王を深く愛しておられます。もちろんサロメ様も。

ユダヤ人2

あの娘は母親似ですよ。気性が荒い。そして、ええ、我仮の嫌いもありますね。

第二の兵士

自由であれという王様の育て方に、ございます。偉大な方です。

ユダヤ人 2

私だったら自分の娘にそんなことは決して言いません。子どもは放っておくと好き勝手な事しかしないんだから

ユダヤ人 1

うん。しかし、美人だ。ほとんどの賓客は、彼女を人目見るために足を運んだようなものだから。

ティゲリヌス

サロメ様が姿を現すことを期待しています。

三人は、宮殿へ去る。

第一の兵士

隊長はいつまでそうして宮殿をご覧になっているつもりですか？

若いシリア人

サロメ様を一目見たいんだよ。

第一の兵士

みんなそう思っていますよ。

若いシリア人

本当に。早く姿を現さぬものだろうか。あのような輩の為ではなく、私のために踊ってはくれぬものだろうか。小首をかけた愛らしい仕草を間近に見れたら、この命さえも手放していい。

第一の兵士

隊長はもう少しサロメ様のこと以外も考えるべきです。

若いシリア人

あの人が祝宴の間にはいない。ここから祝宴の間は良く見えるのに。どれだけ眼を凝らしても見えない。あの人の姿が見られなくて、一体他に何を思えばいいんだい。

第一の兵士

本来ああいう輩の相手は、あなたの方が得意でしょうに。

ため息交じりに兵士は持ち場に戻る、

若いシリア人はまた目線を城に戻す。

またとある日の本番。

ユビア人たちが、長くこの広場に抑留されていることへの抗議として、歌を歌い踊りを踊る。

またとある日の本番。

奴隷三人がカンテラを持ち入ってくる。

奴隷 2

今夜は明るいこと！こんなに月の光が届くのは珍しいわね。

奴隷 1

ねえ、兎を見なかった？

第一の兵士

見なかったな。

第二の兵士

宴に出すものですか？

奴隷 3

いえ、そちらはもうとつくに捌いてあったんですが。

奴隸 2

サロメ様の分。

第一の兵士

まだ宴の場にはお出でになっていないのですか？

奴隸 3

今日はもう誰にも会わないんじゃないかしら。

第一の兵士

それは残念だ。何より隊長殿が残念がる。

奴隸 1

今のサロメ様に、周りをかかずらっている余裕はないでしょうね。

第一の兵士

そんなに苛立っているのかい？

奴隸 1

苛立っているというよりは、塞ぎこんでいるといった様子で。

第二の兵士

何故？

奴隸 1

さあ。知ってる？

奴隸 2

王様に会いたくないからとか。

第二の兵士

そんなわけではない。

奴隸 2

だって、王様がサロメ様に近づくと、ヘロデア様は嫌うじゃない。

奴隸 1

城ではみんな言ってるわ。王様がサロメ様によしまな想いを抱いてらっしゃるって。実際宴の前にも、もちろん今も、サロメ様を探せばかりい

奴隸 2

るわ。サロメ様はそれを憂いてらっしゃるのよ。たださえ、今はローマからの使節が来ているというのに、その前で王様に醜態を晒させることは出来ないでしょう？

奴隸 1

実の母親に嫉妬されるのなんて、いい気持ちはしないでしよう？

第一の兵士

美しいというのは、かくも大変なものかね。

奴隸 2

美しいだけでなく、頭もよくてらっしゃるわ。

奴隸 1

頭がいいから、大嫌いな王様のことも、この国のこともつい考えてしまうのよ。

第一の兵士

しかし、王様が嫌いなどとは信じられないが。ヘロデア様の嫉妬のことも。

奴隸 3

ええ、サロメ様は王様のこともヘロデア様のことも、心から愛していらっしゃるわ。もちろん、王様も同じよ。ヘロデア様とは今でも仲睦まじく過ごしているわ。さつきも、二人で楽しげに杯を交わしてらした。適当に勘ぐるのはお止めなさい。

奴隸 2

じゃあ、本当のところをご存知なんですか？

奴隸 3

踊るのを嫌がっているのよ。よっぽどの事でしょう。あんなにいつも明るく笑顔を絶やささない方が、今日は朝から青い顔をしていたわ。

第一の兵士

どこが悪いのでしょうか？

奴隸 3

分からないけど、あんなサロメ様は初めて見たわ。

さあ、兎は諦めましょう。厨房で頼めば、何か出てくるわよ。

奴隸たちはまた城へと戻っていく。

再び月明かりのみになる。

開演。

零幕  
了

## 第一章

広場。

空には月が青白く光っている。

城からかすかに響く饗宴の音。

一人の女が手に持った小さなつぼを握りしめて歩いてくる。

第一の兵士

おい、駄目だよ。出て行きな！

第二の兵士

今日はいれないよ。宴が催されている。

カパドシア人の女

分かっていますよ。

第二の兵士

なら話は早い。さあ。

又ビア人の男

おい。別にいいじゃないか。俺たちだってここにいることを許されてるんだ。そのお方が許されないなんてことがあるかい？

第一の兵士

招待されているかどうかが肝心なんだ。

又ビア人の男

招待されているかどうか！ しかし、こんなところで待たされてるばかりで、一体何のために招待されたんですかね、俺たちは。

若いシリア人

姫様が踊るのを嫌がっておられる。

又ビア人の男

じゃあ、姫様の気が変わったらぜひともお教えくださいませ。

又ビア人の男は老女の肩を抱き、中へ連れていく。

と、その時、城から聞こえる饗宴の音が一層大きくなる。

怒声や何かが割れる音と同時に、高い笑い声。

第一の兵士

あの野獣みたいな声は何だい。

第二の兵士

ユダヤ人さ。いつもああなんだ。宗旨のことを論じているんだ。

ヘロデアの側仕えが壺を持って現れる。

兵士たちに、酒をふるまいに使わされたのだ。

第一の兵士

なんだってまた。

第二の兵士

いつものことだよ。たとえば、パリサイ派が天使は存在するという。すると、サドカイ派が天使など存在するものか、とこうくる。

若いシリア人

どうした。

側仕え

こちらを。

若いシリア人

サロメ様は。

側仕え

又ビア人の男

カパドシア人の女

又ビア人の男

カパドシア人の女

又ビア人の男

側仕え

若いシリア人

側仕え

第一の兵士

側仕え

第一の兵士

側仕え

第一の兵士

若いシリア人

第二の兵士

第一の兵士

又ビア人の男

第二の兵士

第一の兵士

又ビア人の男

第一の兵士

側仕え

第二の兵士

又ビア人の男

第一の兵士

第二の兵士

又ビア人の男

第二の兵士

まだお部屋に。

馬鹿馬鹿しい。そんなことに目くじら立てるとは。

今宵は随分と月が青いこと。

僻地のまじないかい？ 月から何か分かるとか。

ただの感想ですよ。あなたはどうか思い？

俺には分からないな。それこそ雲がないからか、いつもよりずっと大きく

は感じるが。そんなのは大した意見じゃあないだろう？

本当に不思議な月。

きつと大層な美しさだろうな。

あなたもご覧なさい。まるで墓を抜け出してきた女みたい。夜毎に屍をあ

さり歩くんですよ。

何故です？

夫を捜してるんです。ゆっくり身体をゆすりながら、そつと呼ぶんですよ。

夫の名前を。

恐ろしい女ですね。

あなたにお子さんがお生まれになったら、この話をしてやりなさい。最後

にこう言うんです。「だから、夜に外を出歩いてはいけない。代わりにお前

が連れ去られてしまうぞ！」って。

なるほど。

月だつてきつと敵わないだろう。今宵のサロメ様に早くお目にかかりたい

ものだ。

王様は暗い顔をしておられる。

ああ。確かに暗い顔をしておられる。

月のせいかもしれない。

何かをじつと見ているようだ。

誰かをじつと見ているようだ。

誰を。

分かん。

この人は見えるものを見ないで、見えないものを見ようと目を凝らしてい

るばかり。そんなものの見方はよくない。なにか嫌なことが起きそつ。

ヘロデア様が王様の杯に酒をつがれた。

あの方がお后様ですか？ 真珠を飾った黒いフードをして。

そつだ。あれがヘロデア様だ。

王様は酒に目がない。三種類のぶどう酒を召し上がる。

豪勢なことだよ。その三種類というのは。

ひとつは、サモスレイスの島のもので、ローマ皇帝の外套そつくりの紫色

をしている。



又ビア人の男

ローマ皇帝だつてさ。

カパドシア人の女

私は見たことはありませんね。

第二の兵士

もうひとつは、キプロス産で、黄金のように黄色い。

第一の兵士

黄金は好きかい？

又ビア人の男

嫌いな者なんていませんよ。

側仕え

あら、あたしは好きではないですよ。嫌いなんで言い切れはしませんけどね。勿論。

カパドシア人の女

最後は何ですか。

第二の兵士

シチリアの酒だ。その酒は血のように赤い。

又ビア人の男

そいつはいい。俺の国の神々は血には目がない。国では年に二回、若い男と女を生贄にささげますよ。男は五十人、女は百人。ところが、それでも足りないらしい。我々を随分とひどい目に合わせるからね。

カパドシア人の女

私の国には、神様なんて残ってやいませんよ。ローマ人たちがみんな退治してしまつた。神様は死なないなんて言う人もいますがね、神様だつて死ぬんですよ。私の娘は、三日三晩山中を探し回りました。最後には神々の名前まで呼んでみたそうだが、姿を現さなかつた。きつと死に絶えてしまつたんです。

第二の兵士

ユダヤ人は、目に見えない神をあがめているそうだ。

カパドシア人の女

私には到底分りませんよ。

第一の兵士

實際奴らの信じるものなんて、目には見えないものばかりさ。

第二の兵士

馬鹿げた話だ。

若いシリア人

サロメ様がお出でになつた！

なんとお美しいことか。不思議な足の運びをしている。鳩のように、踊りを踊っているかのように。

側仕え

お務めだわ。私は戻りますね。

ヘロデアの側仕えは立ち上がり、城へと歩き出す。

ヨカナーン

私の後から、私よりも力のある方がやってくる。私は、そのお方の靴紐を解くほどの値打もない。偉大なお方だ。荒地さえも喜びに花を結び、傷つた者たちを癒す。

第一の兵士、牢へと近づき、蹴飛ばす。

第一の兵士

いつもふざけたことを抜かす。

第二の兵士

やめろよ。放っておくんだ。その内黙る。

側仕え

毎日食事を運ぶと、そのたびに礼を言います。

第二の兵士

おとなしい時もあるんだ。君は知らんだろうが。一体どなたなんですか。

第二の兵士

預言者だ。

又ビア人の男

お名前は。

第二の兵士

ヨカナン。

又ビア人の男

いつも、あの、ああいった言葉を？

第一の兵士

俺にはさっぱり分からない。時々ああいった気の触れ回るようなことを言う。

若いシリア人

また部屋の中へと隠れてしまった。

側仕え

何故ああも見てばかり。やっぱり今日は奇妙なことばかり起きる。何かありますよ、今日は。

へロデアの側仕え、退場。

又ビア人の男

あれは牢屋なんですか？

第二の兵士

ああ。

又ビア人の男

奇妙な牢屋ですね。

第二の兵士

城へと向かうものは必ずこの牢屋を目にする。

又ビア人の男

何故このような造りに？

第二の兵士

それは、私にはとても言えない。

カパドシア人の女

野ざらしで、さぞ身体には毒でしょうよ。

又ビア人の男

あなたは、ご存知だったんですか？

カパドシア人の女

あるお方を幽閉するために、わざわざ造られたの。

又ビア人の男

奴隷か何かですか？

カパドシア人の女

フィリポ様。王様の兄君です。

又ビア人の男

嘘でしょう？

カパドシア人の女

十二年も幽閉されていたのですよ。それでも耐え忍び、なかなか死なないものだから。やむなく十二年目の終わりに、処刑人によって首を落とされてしまったんです。

又ビア人の男

大それた事をした奴もいたもので。

カパドシア人の女

怖がりではなかったはずですよ。王様から死の指輪をいただいていたから。なんの指輪ですって。

又ビア人の男

カパドシア人の女

死の指輪ですよ。だから平気だったんです。

又ビア人の男

しかし、何故王様は、ご自分のお兄様を幽閉なさったんですか？

カパドシア人の女

王様の奥方様は、へロデア様。

又ビア人の男

ええ。

カパドシア人の男

へロデア様は、昔はフィリポ様の奥方でもありました。

ヌビア人の男

へえ。

カパドシア人の女

兄弟で、同じ女性を愛してしまわれたんです。

第二の兵士

フィリポ様は、ヘロデア様に大層冷たく当たってらした。王様は兄君のその態度に心を痛めておられた。ヘロデア様がそのことで相談なさっている姿をあの頃はよく見かけた。お二人が愛し合われるようになったのは、それからまもなくのことだ。

第一の兵士

当然の事だよ。より深く愛して下さる方を選ぶほうが、女だって幸せに決まってる。

二人のナザレ人の女性が入ってくる。

カパドシア人の女

あら、だから幽閉するのですか。

第二の兵士

逆恨みを覚えたフィリポ様が、反乱を企てたからだ。やむなしだよ。

ナザレ人1

あの。

若いシリア人

どうなさいましたか？ 祝宴は。

ナザレ人1

少し熱気に当てられてしまいました。こちらの宴は、随分と長く行うのですね。これでは明日もあさっても、私たちは同じ服を着て踊っているかもしれないません。

若いシリア人

今日は特別です。ローマからの使節団の方々も来てらっしゃいますから。

ナザレ人2

ええ、お驚きました。本当に名誉なことです。

若いシリア人

ありがとうございます。

第一の兵士

私たちも驚きました。ユダヤの方というのは、皆あれほど四六時中議論を重ねているものなのですか？

ナザレ人2

いえ、あれはユダヤといっても、私たちとは違う階級の方たちなので。

第一の兵士

ああ。

ナザレ人2

本当のことを言うと、私たちにも、あの方々の話すことが分からないときがございます。

第一の兵士

そうなんですか。

ナザレ人2

お恥ずかしいことですが。

第一の兵士

いえ、失礼しました。

若いシリア人

それは。

ナザレ人1

はい。お尋ねしたいことがありまして。(盆を持ち上げ)これをあの方に差し上げたいのです。

第一の兵士

あの罪人にですか。

ナザレ人1

(うなづく)

若いシリア人

面識があるのですか。

ナザレ人1

一度だけ、ヨルダン河で。

第一の兵士

ナザレ人1

しかし、それはなりません。

私はこちらにお会いできたことを、神に感謝しております。それほどにあなたの方は私たちに良くしてくださいました。

第一の兵士

ナザレ人1

しかし、今では罪人です。

第一の兵士

ナザレ人1

あの人は満足な量を食べてらっしゃいますか？  
適切な量を与えています。

ナザレ人2

では、それをあの方本人に尋ねてもよろしいですね？ いただくかどうかは、あのお方が決めればよいことですもの。

ナザレ人2

申し訳ありません。しかし、お許しいただきたいのです。私たちは、ここに着いた時から、あの牢獄のことが気になっておりました。最初はまさかと思いましたが。しかし、今はあの方があそこにいることにも納得しています。あの人らしいときえ思います。お話しすることさえ出来れば、私たちもおとなしく祝宴の場に戻りましょう。

第一の兵士

いずれにせよ、私には許しを与える権限はないのです。隊長ならば可能でしょうが。

若いシリア人

では、あなた一人ならば。彼が付き添います。もちろん鍵を開けることは

ナザレ人1

出来ません。それでよろしいですか。

ナザレ人1

ありがとうございます。

第一の兵士の先導で、ナザレ人1は牢へと近づく。

眺めるナザレ人2にヌビア人の男が近づく。

ヌビア人の男

宴はどんな様子ですか。

ナザレ人1

とても豪勢で、素晴らしいものですわ。

ヌビア人の男

催し物は。

ナザレ人2

近衛兵の行進や、ペルシアの踊りや、色々ありましたけれど、今はおさまっています。

ヌビア人の男

その踊りの中に王女様は、サロメ様はいらっしゃいましたか？

ナザレ人2

あら。そういえば、サロメ様にはまだお目にかかれていません。

ヌビア人の男

では、宴はまだ続きますよ。一番の出し物はこれからです。

ナザレ人2

でも、その頃には、私の目はくっついてしまって、開かなくなっているかもしれません。

ナザレ人1

もしも。あんまり色んなものを見過ぎました。

ナザレ人1

あなたは私のことを覚えてはらっしゃらないでしょう。あの時ヨルダンには沢山の人がいましたから。しかし、私の夫はナザレの総督を勤めています。

ヨカナン

ここは淫蕩にまみれている。ソドムやバビロンと同じだ。神の声も私の耳には届かない。この城の主は罪を満たした酒を手に、地に邪悪を撒き散ら

ナザレ人1 している。その罪業はいずれ神の耳にも届くだろう。  
葡萄酒を持ってまいりました。

ヨカナン ここものは飲みたくない。

ナザレ人1 石榴もあります。不浄を退けるといわれております。

ヨカナン では、あなたが。

ナザレ人1 いえ。私はもう十分に頂きました。城のものは皆十分すぎるほどに食べて  
います。

ヨカナン では。

ナザレ人1は石榴の実をヨカナンに手渡す。

ヨカナンはそれへは食べずに脇に置く。

第一の兵士

よろしいですか。

ナザレ人1

ええ。

又ビア人の男

あの人は何故牢屋に？

カパドシア人の女

王の結婚のことですよ。

ナザレ人2

あの方は正しいことをおっしゃいました。私はそう信じています。

第二の兵士

慎みください。ここはガラリヤ領主ヘロデ・アンティパス様の居城にあら

ナザレ人1

せられます。

ヨカナン

私たちは戻ります。

第一の兵士

主は来られた。人の子を遣わして、半人半馬の怪物も身を潜め、人魚共は

第二の兵士

川を去った。

第一の兵士

また何かを言っている。

第二の兵士

放っておくんのだ。

ナザレ人1

不思議な月。雲もある夜なのに、隠れるということがない。あの方のこと

ナザレ人2

をじっと見てらっしゃるみたい。

ナザレ人1

いいえ。見ているのはきつと違う人よ。今はどこにいるのかも分からない

ナザレ人2

けれど。